

立圃「三十六禽十八番発句合」紹介と翻刻

倉島利仁

はじめに

加藤定彦先生から御所蔵の立圃筆「三十六禽十八番発句合」を紹介する機会を頂いた。深謝申し上げると共に、簡単な書誌・解題を記した上で、本文を翻刻したい。

書誌

卷子装一軸。茶色地に唐花唐草紋様絹表紙、縦二七・四、横二二・九糎。金箔の題簽を貼るが、空白のまま。見返しは金銀切り箔散らし押紙。本文は九紙継ぎの鳥ノ子雁皮紙で、全長四四六・〇糎（各紙は凡そ五〇糎）。桐箱の蓋の表に「拾八番発句合 雛屋立甫書」、蓋の裏には「慶応乙丑之季秋 六政主人城音観題「印」「印」と墨書、箱の天地にはそれぞれ「立甫筆三十六禽十八番発句合卷」「立圃卷物」と記した紙片を貼る。また、箱の中には「立甫卷物」と書かれた紙片がある。

内題は「三十六禽 十八番之発句合」。奥書には「明暦二年（一六五六）七月中句書之／立圃「印」とあり、捺された印は朱の方形の内側を丸く抜いた中に「甫」とあるもので、『野々口立圃集』所収「館蔵立圃自筆本の落款等図版一覽」の内、12（「年立帰る等句文」）及び13～15（「立圃自筆卷」上・中・下卷）に見られるものと同じだろう。

解題

立圃の句合について、松尾真知子氏は「休息歌仙」以外の「句合形式の作品」を以下のように挙げている。^④

- ① 「十八番諸職之句合」万治三年（一六六〇）八月『近世文芸稿二十四』昭和五十三年^⑤
- ② 「十八番草木之句合」寛文元年（一六六一）三月
- ③ 「十二支之句合」寛文元年十月
- ④ 「十二番諸職之句合」年代不明

⑤「三十六禽句合」年代不明「天和元年（一六八二）刊『書籍目録大全』による」

ここに紹介する一卷は、右に⑤とする作品の一つだろう。「古俳書目録索引」によれば、阿誰軒編『誹諧書籍目録』（元禄五年刊）に「卅六禽句合 一冊 卅六鳥ヲ集左右ヲ分発句勝負也」、若海稿「故人俳書目録」（天保頃成）に「卅六禽句合 一 立圃卅六鳥を左右に分発句勝負アリ」とあり、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースにも「俳諧書籍目録による」として「三十六禽句合」を掲載するが、本作品の伝本は他に知らない。

また、「三十六禽句合」の制作年代はこれまで不明だったが、本巻子の奥書から、現存する立圃の句合の内、「休息歌仙」（花月十八番句合）の諸本数点を除いて最も早い執筆であることが判明する。

ところで、本作品の題材となった「三十六禽」とは何だろうか。「日本国語大辞典」「三十六禽」の項では、

一昼夜二二時の各時に一獣を配し、そのそれぞれの獣に、また、二つの属獣がついた計三十六の鳥獸。五行ではそれをトに用い、仏家ではそれぞれの時にあらわれて坐禅の行者を悩ますとされる。

と解説し、『拾芥抄』下「三十六禽部」を引用する。慶長刊と推定される古活字版『拾芥抄』（国会図書館蔵）で確認してみると、「魚・蛟・龍・貉・兔・狐・虎・豹・狸・鼈・蟬・牛・伏翼・鼠・

鸞・猪・兪・豕・豺・狼・狗・雉・鷄・烏・猴・猿・雁・鷹・羊・麀・馬・鹿・蛇・蛆・鰻」と三十六種の鳥獸が並べられ、本作品では「鸞」の代わりに「燕」が使われている。時代は下るが、『増補仏像図彙』（寛政八年刊）巻三には「卅六禽形象」として「鼠・豺・牛・蟹・鼈・狸・豹・虎・狐・兔・貉・龍・蛟・魚・蟬・蛆・蛇・鹿・馬・狎・羊・鷹・鷹・鷹・狗・猿・猴・雉・狗・狼・豺・狸・猪・燕」を送入りで挙げるが、本作品では「蛟」が「みづち」と扱われるほか、「豺」「蟬」「狙」「狗」「狸」がそれぞれ「伏翼（かはほり）」「鰻（うなぎ）」「麀（鹿子）」「雁（やまこ）」「豕（ゐのこ）」となっている。「三十六禽」の鳥獸を立圃が何によったか明らかにし得ないが、三十六歌仙を題材とする句合をすでに制作し、数年後にも三十六種の諸職や草木を題材にした句合を作る立圃が、「三十六」の名数に興味を引かれたことは不思議でなからう。

一方、立圃の句合の多くが発句を番えているのみであるのに対し、本作品最大の特徴は、立圃自身による俳諧味あふれる判詞が記される点にある。句を詠んだ鳥獸が互いの句を難じ、また陳ずるという形式の判詞の中では、古歌を引き、『伊勢物語』『源氏物語』などの古典、あるいは和漢の故事を踏まえた表現が随所に見られるが、その一方で世話・諺の引用や俗語の利用など俳諧の文章に特徴的な部分も多い。立圃らしい穏やかな文体で、奇を衒うような表現は少ないが、例えば、「狗」が「猿」の句を「色増さる（紅葉が色づく）」という後言（噂話）は全く理解できない」と難じた「色まさるのしりうごこそ」に「猿の尻」が言い掛ける（六番）など、細かな工夫も見ることができるといえる。また、「猿

ぐつわをはめられ無言」の「猴」に対し、「狐」は野狐禪の連想から「座禪工夫の折なれば固く無言」であったり（三番）、「蛇」が「による」と出て鎌頸をたて、申す」のに対し「蟹」が「打うつぶいてつぶやく」（十二番）、「鶏」が「冠けだかくきなし、裾を引のべて衣紋つくろひ、声たからかに」言うのに対し、「魚」は「口をあきながら物もいはず」（十五番）など、鳥獣の特徴を対比的にとらえた表現も面白い。これらの判詞は、穏やかな滑稽と雅趣を兼ね備えた、立圍の俳諧的特徴をよく示した文章と評すことができる。

最後に、執筆当時の立圍の動向について確認しておきたい。米谷巖氏「野々口立圍年譜」⁽⁸⁾によれば、明暦二年正月、立圍は水野日向守勝貞公に伴い江戸藩邸で新年を迎えた。五月に発句集一卷、六月中旬には「休息歌仙」他一卷⁽⁹⁾を執筆している。六月二十八日に江戸を出立、水野勝貞に従って東海道を西上、七月十一日に大阪を船出、間もなく福山に帰国したことが『丙申紀行』⁽¹⁰⁾に記されている。『丙申紀行』によれば、前年の夏に備後国福山を出立して以来、江戸藩邸では主君と共に折に触れ俳諧を楽しんだようで、「夏の比には二千句ばかりもみちぬ」と述べている。七月、六十二歳の立圍は江戸から福山へ忙しく移動をしながらも精力的に創作活動を行い、本巻子はそのような中で執筆されたのである。

翻刻に当たっては、適宜句読点・濁点を補った。変体仮名の片仮名は平仮名に、旧字・異体字は概ね通行の字体に改め、難読の箇所には注を施した。

翻刻

三十六禽 十八番之発句合

一番

左勝 鳥

ほんのりとあかしかすみの日の鳥

右 兎

月影や寔にしらぬ白うさぎ

右方申云、左の句無指難。

左方申云、白兎を寔にしらぬ月かとなるべし。されど、月影やとあればいづれを似せ物とも聞わけがたし。

二番

左 羊

かけまはるひつじや庭の花車

右勝 鹿

音ながらや庭籠にうつすしかな草

右方申云、羊殿のをもくしき躰にてかけまはられん事、如何。

陳云、かけまはるは馳る心に非ず。車をかけまはるの首尾也。

左方申云、

秋の野の萩のにしきを我宿に鹿の音ながらうつして

しかな

とは聞ゆれど、声なき草を音ながらうつすと治定すべき
事にあらず。

陳云、萩さく比、鹿のなくなれば此名あり。啼の字にて
音にひとしかるべし。

三番

左 持 狐

野狐のわをぬけずはわなや胸の霧

右 猴

河口のこほりや声のさるぐつわ

右方、猴ぐつわをはめられ無言。

左方、座禪工夫の折なれば固く無言。

四番

左 持 鼈

五月雨をしらぬは亀の蓑毛哉

右 蛆

あしはやき雲はむかでか北しぐれ

右方申云、蓑は雨を凌ん為にきる物也。亀は水にすめば、
ぬれをいとふにはあるべからず。

左方申云、時雨の雲あしの早きたとへはおかしけれど、
雲のあしは数見えぬ物也。むかでのあしはいざぐと数

おほければ、たゞ雲を除て雨になぞらへたらんはまこと
しからん歟。

五番

左 勝 伏翼

かはほりや其なりひらの舞あぶぎ

右 鼠

雨にひくけふの小松やぬれねずみ

右方、小声たつて申す、其業平はむかしおとこといひ、

陰陽の神ともいはれし人なるに、蝙蝠の見にくきかたち

をたとふるは勿躰なし。

陳云、おもひよる所かたちにはあらず。其舞扇かと思た

てたる也。

左方、ひゝらきみて申す、愛らしき小松をむくつけき鼠

になぞらへたる、世話に我はして人のほらけや嫌ふらん

とは此事ならんかし。

六番

左 勝 猿

おく山のもみぢもいかで猿のしり

右 狗

ころくところかする呼か雪のいぬ

右方、をそろしげなる声して云、紅葉の錦といひ、今一
たびの御幸またなんどいはれし物を、色まさるのしり

うごこそ、さらに心えられね。

左方、まなこをいからかして申さんとす、み出つれど、
かれが声にをそれて猶赤面す。

七番

左持

雉

とらゆるやけんもほろゝのきじの声

右

鱒

しの字には露もたがはぬうなぎかな

右方不難申。

左方云、一字は千金にもかへがたきと申すに、をのがか

たちを高上にいひなす事、ためしなかるべし。

陳云、夫文字は鳥の跡よりはじまり、雁をも文字に見な

せり。筆法には魚鱗虎爪の習ひありとやらん。

八番

左勝

猪

よるくの霜や臥猪の床ばしら

右

蛟

夕だちやみづちのわかつながら川

右方云、心はさもあらばあれ、句躰すねくしきやうに

こそ。

左方云、蛟の力ばかりにてながれ川をわかつたん事いぶか

し。風のちからをかりねよかしとぞ。

九番

左持

聲

夏山やもえぎに染て飛鹿子

暑き日はたぬきの腹やはりつゝみ

右

狸

右方申。夏山の折にあひたるだてかたびらの出立、当世

やうと覚てわかしくこそ。

左方申す。をとにき、し鼓の上手、拍子あひ、心もそゝ

ろに、うきにうかるゝありさまにや。

十番

左勝

龍

花は波散やこずゑにのほり龍

右

虎

あつき日は虎に千里の風もがな

右方、左の句を二三遍嘯て云、のほり龍ならば雲にこそ

乗べけれ。

陳云、龍は水をもまきあぐる也。其上雲の波とてたゞち

もあらざるべし。

左方、右の句を吟じ返し、舌をふりたて、申す。暑き日

は千里の風ならずとも、我身にあたる程の風のみこそふ

かせまほしけれ。大欲心あらはれたる躰にや。

陳云、身ひとりの風をねがはんこそ、大欲心なるべけれ。

千里が間の有情非情あまねくよるこばしめんは、仏菩薩

の御心にも相かなふべきにこそ。

十一番

左持

狼

おほかみも共にまだらや雪の山

右 獺

雪さそふ雲はやまこのかたちかな

右方、わめきあげて申す。斑や雪の詞、時しらぬ山は富士の根のふかき雪のけしき、何に心のかはりあらん。かのこまだらはいたいけして面白し。狼はけやけて句のさまこはくし。

左方、また、きもせで広言をはなつ。雲は石根におこり、又煙立のほりて雲となる。ゆへに虚空にたなびきて其かたちといふべき物なし。悪風をおこし、則又風にきゆるなれば、やまこのかたちおほつかなかるべし。

十二番

左 持 蟹

横ばひやかに、ならひて蔦かづら

右 蛇

くちなはとみえていちごのつるもなし

右方、によるくと出て鎌頸をたて、申す。蔦かづらに横ばひををしゆる事、大きに難あり。物毎に直なるをこそよしとはいへ、邪道をつたゆる、是何のゆへぞや。思無邪とありて、鬼神だにも横道なしといひつたへたり。

陳云、豎にゆくも直也。横にゆくも直也。いづれを邪道といはん。惣じて道は十文字なる物也。

左方、打うつぶいてつぶやく。覆盆子のつるのか、りがましきをさへよからぬ筋なるに、くちなはと見まがふ程

のくねくしきすがた、見きくもをぞましくぞ。

十三番

左 勝 牛

うしの日かをそく暮ゆく春の空

右 猪

秋の野の花はしなぐむじなかな

右方申云、春の日のをそく暮ゆく、ゆたかなる空には萬木千草枝をつらね、葉をならべ、我らごときの獣まで、遊び所おほく、食物にあきみち、さらに難じがたし。

左方、涎をながして申す。秋の野の花の品々をおもしろげに見たてらるれど、春の野山の風景にいかでかまさらん。

十四番

左 勝 雁

かりがねや空よりそらにかへりてん

右 燕

そらとぶはつぶての石かつばくらめ

右方、はや口に申。春の花さく比は、はるかなる世界より年々見に来るもあるに、見すて、帰る心の程あさばかにこそ。

左方、くびをさしのべて申云、そら磔のあて所もしらず、飛過たる作意あぶなげにおぼえ侍り。

十五番

左勝 魚

つりざほの糸にしたらよさくら魚

右 鶏

夜もながし尾も長くし鳥の声

右方、冠けだかくきなし、裾を引のべて衣紋つくるひ、

声たからかにはく、左の句、ことばのつぎのみにて

心ことなる事なし。

左方、いひさしにして口をあきながら物もいはず。

十六番

左 兪

かさねばや雪もふるぎのかはごろも

右勝 豺

月くらきおほかめ谷やはた山

右方云、句のさま大かたは我心をあらはず也。逆ねがふ

程ならば、綾錦に心をかけずし、何ぞやふるぎのかはご

ろも、浅ましかりしねがひなり。末つむ花と聞えしも、

下品のためしにいへり。

陳云、富てだにおごる事なきをよしとす。まして石くら

のあはひ、土穴にすみて、身にも応ぜぬねがひ、うたて

有べし。

左方、尤句のさま、其心くをいひたつる物ならし。た

けきもの、ふの心をやはらげ、男女の中だちともなるな

れば、しなやかなるこそほゐならめ。所の名さへおほか

め谷、あらこはた山月くらき折からといひ、心をよすべ
きかたもあらず。

十七番

左持 豹

へうの毛や照にてりたる星月夜

右 豕

みつかひとつけふもたまはれぬのこ餅

右方、たゞむゝとして不難申。

左方、尾をひしき物にして、ひそかにかたらふ。句の勝

劣は判者にまかせをき侍りぬ。其のこの餅とやらんは

いかなるぞ。ちと我にも見せさせ給へかし。

十八番

左 鷹

つかはすはいかでしらふの鷹詞

右勝 馬

夕立はふりわけ髪やむまの時

左右不難申。

明曆二年七月中旬書之

立圃(印)

注

- (1) 天理図書館綿屋文庫俳書集成13巻、八木書店、平成8年4月。
- (2) 天理図書館綿屋文庫蔵、わ四三一八―四一。
- (3) 天理図書館綿屋文庫蔵、わ四三一八―二一・二三・二五。
- (4) 「休息歌仙」の成立」(『連歌俳諧研究』84号、平成5年3月)。
- (5) 下垣内和人氏・米谷巖氏・壇上正孝氏「『十八番諸職之句合』解題と翻刻——立圃俳諧資料考——」。
- (6) 乾裕幸氏編、赤尾照文堂、昭和49年9月。
- (7) 他に、春明著『誹家大系図』(天保九年刊)「親重」に「三十六禽句合」とある。
- (8) 古典文庫『十帖源氏 下』平成元年7月。
- (9) 沢井耐三氏「穂久邇文庫『明暦二年立圃発句集』紹介」(『愛知大学国文学』17号、昭和53年7月)。
- (10) 天理図書館綿屋文庫蔵、わ四三一八―三。杉浦正一郎氏『芭蕉研究』(岩波書店、昭和33年9月)に紹介・翻刻。
- (11) 松田芳昭氏「立圃の作品三編」(『国文学攷』38号、昭和40年11月)。
- (12) 鈴木勝忠氏編『雑俳語辞典』(東京堂出版、昭和43年3月)に、「いづぢいづぢ。いぢいぢ。」とある。上宝永3湯だらひ「いぢいぢ」と。気の多さうな紋処」とある。
- (13) 『醒醉笑』(寛永五年自奥)巻一所収の笑話が出典。『せわ焼草』(明暦二年刊)にも「我はして人のぼらけは嫌ふ」とある。

(14)

『日本国語大辞典』の「やまこ」【山子】に、「④山中に住んでいるという妖怪(ようかい)。山の精気の凝ったものとも、猿の年を経たものともいう」と解説し、「*十卷本和名抄(93^頁)七「獯 抱朴子云猿寿五百歳則变为獯(音擢 漢語抄云夜末古)」との引用がある。

(くらしまとしひと 静岡学園高校教諭)